

高等学校学習指導要領解説  
地理歴史 統計関係部分抜粋

第2章 各科目

第1節 世界史A

2 内容とその取扱い

(1) 私たちの時代と歴史

現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から、近現代の歴史的現象と現在との結び付きを考える活動を通して、歴史への関心を高め、歴史を学ぶ意義に気付かせる。

(内容の取扱い)

ア 内容の(1)については、この科目の導入として位置付けること。また、近代、現代などの時代区分の持つ意味、近現代の歴史の考察に有効な諸資料についても扱うこと。

「近現代の歴史の考察に有効な諸資料」(内容の取扱い)としては、文献、地図、写真、映像、統計、グラフなどのほか、博物館や郷土資料館などにある諸資料、身の回りの生活文化や地域の文化財、地名等も考えられる。ここでは、様々なものが歴史的資料となりうることに着目させるとともにそれぞれの特性に気付かせ、内容の(2)の「ウ 近代の追究」及び(3)の「ウ 現代からの探究」で行う資料を活用して歴史を考察する学習につなげるよう配慮する。とりわけ、内容の(3)の「ウ 現代からの探究」は「日本史A」のまとめとして位置付けられている学習であるが、ここに示す科目の導入「私たちの時代と歴史」との関連を踏まえて実施するものであることに留意する必要がある。

## (2) 近代の日本と世界

### ウ 近代の追究

近代における政治や経済、国際環境、国民生活や文化の動向が相互に深くかかわっているという観点から、産業と生活、国際情勢と国民、地域社会の変化などについて、具体的な歴史的事象と関連させた適切な主題を設定して追究し表現する活動を通して、歴史的な見方や考え方を育てる。

(内容の取扱い)

イ 内容の(2)のウ及び(3)のウについては、資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を高めること。

「産業と生活」については、例えば「繊維業の発展は近代日本の経済においてどのような意味をもち、これによって人々の生活はどのように変化したのか」という主題を設定し、統計資料などを活用しながら考察することができる。

### (3) 現代の日本と世界

第二次世界大戦後の政治や経済，国際環境，国民生活や文化の動向について，現代の諸課題と近現代の歴史との関連を重視して考察させる。

政治，経済，国際環境，社会，文化など多様な要素が複雑に関連し合って展開する現代の歴史をとらえさせるために，主に政治的な視点からの学習を重視する中項目「ア 現代日本の政治と国際社会」と，主に経済的な視点からの学習を重視する中項目「イ 経済の発展と国民生活の変化」とで構成している。さらに，大項目(2)で取り扱った近代史にかかわる学習内容とこの大項目で扱う現代史の学習内容とを踏まえ，中項目「ウ 現代からの探究」で，現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されてきたという観点から，適切な主題を設定して探究し考えを表現する活動を通して，歴史的な見方や考え方を育成する。

#### ウ 現代からの探究

現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から，近現代の歴史にかかわる身の回りの社会的事象と関連させた適切な主題を設定させ，資料を活用して探究し，その解決に向けた考えを表現する活動を通して，歴史的な見方や考え方を身に付けさせる。

(内容の取扱い)

イ 内容の(2)のウ及び(3)のウについては，資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を高めること。内容の(3)のウについては，この科目のまとめとして位置付けること。

内容の取扱いの(3)のイに示されているように「資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を高める」必要がある。その際，文献，絵画，写真，統計，グラフ等の既存の資料や博物館などの施設を活用するだけでなく，身近な人々からの戦中・戦後の体験の聞き取り，郷土の近代化遺産や戦争遺跡の見学，それら文化財の歴史的意義の考察なども考えられる。

## 第5節 地理A

### 2 内容とその取扱い

#### (1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察

世界諸地域の生活・文化及び地球的課題について、地域性や歴史的背景を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を深めるとともに、地理的技能及び地理的な見方や考え方を身に付けさせる。

この大項目は、各中項目において作業的、体験的な学習を取り入れつつ、現代世界の地理的認識を深めるとともに、地理的技能及び地理的な見方や考え方を育成することを主なねらいとしている。このねらいを達成するために、この大項目は、「ア 地球儀や地図からとらえる現代世界」、「イ 世界の生活・文化の多様性」及び「ウ 地球的課題の地理的考察」の中項目から構成されている。

#### ア 地球儀や地図からとらえる現代世界

地球儀と世界地図との比較、様々な世界地図の読図などを通して、地理的技能を身に付けさせるとともに、方位や時差、日本の位置と領域、国家間の結び付きなどについてとらえさせる。

##### (内容の取扱い)

アについては、球面上の世界のとらえ方に慣れ親しませるよう工夫すること。日本の位置と領域については、世界的視野から日本の位置をとらえるとともに、日本の領域をめぐる問題にも触れること。また、国家間の結び付きについては、世界の国家群、貿易、交通・通信、観光の現状と動向に関する諸事象を様々な主題図などを基にとらえさせ、地理情報の活用の方法が身に付くよう工夫すること。

「地理情報の活用の方法が身に付くよう工夫すること」(内容の取扱い)とは、この中項目で身に付けさせたい地理的技能を示したものである。ここでいう「地理情報」とは、国家間の結び付きや貿易などが活発化、複雑化していることをとらえるのに有用な資料のことである。このため、幾つかの年次にわたって得ることが可能であり、変化の様子を読み取ることができるものを収集、選択する必要がある。「地理情報の活用の方法」とは、収集した地理情報を目的に合わせて選択・処理し、地域性を読み取ったり、地域性と関連付けてとらえたりすることを意味している。したがって、ここで身に付けさせたい地理的技能は、年次の異なる主題図や統計などを比較し関連付けて、世界諸地域の結び付きやその変化の様子をとらえる上で必要となる地理的技能ということになる。

なお、この中項目の学習に関しては、中学校社会科地理的分野の大項目「(1) 世界の様々な地域」の「ア 世界の地域構成」や大項目「(2) 日本の様々な地域」の「ア 日本の地域構成」などを踏まえるとともに、現代世界の地理的認識の基礎であることを考慮して、生徒の興味・関心の喚起に努め、主体的に学習できるよう工夫することが大切である。例えば、国家の面積を示した統計と異なる図法による世界地図を用いて、地図のひずみを考えさせたり、白夜の映像を示してその仕組みを考えさせたりするなど工夫することが重要である。また、指導計画の作成に当たっては、生徒の実態や学校の施設や備品の整備状況に応じて工夫する必要がある。

## (2) 生活圏の諸課題の地理的考察

生活圏の諸課題について、地域性や歴史的背景を踏まえて考察し、地理的技能及び地理的な見方や考え方を身に付けさせる。

(内容の取扱い)

アからウまでの項目については、地図の読図や作図などを主とした作業的、体験的な学習を取り入れるとともに、各項目を関連付けて地理的技能が身に付くよう工夫すること。

この大項目は、各中項目において作業的、体験的な学習を取り入れつつ、主に生活圏などの地域規模の地理的事象や諸課題の地理的認識を深めるとともに、地理的技能及び地理的な見方や考え方を育成することを主なねらいとしている。このねらいを達成するために、この大項目は、「ア 日常生活と結び付いた地図」、「イ 自然環境と防災」及び「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」の中項目から構成されている。なお、「生活圏」とは、学習者が高校生であることを考慮すると、おおむね生徒の学校所在地を中心とする通学圏など日常生活圏の範囲を意味している。

### ア 日常生活と結び付いた地図

身の回りにある様々な地図の収集や地形図の読図、目的や用途に適した地図の作成などを通して、地理的技能を身に付けさせる。

(内容の取扱い)

アについては、日常生活の中でみられる様々な地図を取り上げ、目的や用途に適した地図表現の工夫などについて理解させ、日常生活と結び付いた地図の役割とその有用性について認識させるよう工夫すること。

「目的や用途に適した地図の作成などを通して」とは、位置や空間的な広がりとかかわりでもとらえられる地理的事象は地図化することが可能であり、また、地図化することによって、分析、考察が一層進むことから、地理的なまとめ方として例示したものである。指導の際には、表現したい内容に合った適切な縮尺を選択することや、縮尺に応じて地形や建築物の形を省略して表現するいわゆる総合描示（総描）などの技能についても触れることが求められる。また、従来から指導されている階級区分図や図形表現図などに加えて、イラストマップのような日常生活で作成、利用する機会が多い地図も積極的に取り上げることが考えられる。その際に、地図を作成したりそこから様々な情報を読み取ったりすることが便利であり、また楽しいものであることを、生徒自身が実感できるように指導を工夫する必要がある。ここでいう「地図の作成」とは、単に地表面の現実世界を縮小し図化することだけでなく、取り上げるべき内容を吟味し、取捨選択を行ったり、目的に応じて表現したい情報が読み手に伝わるように工夫したりするなどの学習活動である。すなわち課題を設定する段階で行われる地図化、収集した情報を整理するための地図化、それを分析するための地図化、まとめた内容を表現するための地図化など、学習の様々な場面で行われる活動を意味している。

## ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査

生活圏の地理的な諸課題を地域調査やその結果の地図化などによってとらえ、その解決に向けた取組などについて探究する活動を通して、日常生活と結び付いた地理的技能及び地理的な見方や考え方を身に付けさせる。

(内容の取扱い)

ウについては、生徒の特性や学校所在地の事情等を考慮し、地域調査を実施し、その方法が身に付くよう工夫すること。その際、これまでの学習成果を活用すること。

「その解決に向けた取組などについて探究する活動を通して、日常生活と結び付いた地理的技能及び地理的な見方や考え方を身に付けさせる」とは、この中項目で育成したい学習の方向を示したものである。ここでいう「探究する」とは、生徒が生活圏にみられる課題を自ら設定し、情報の収集、整理・分析を行って、立てられた仮説を検証してまとめる一連の活動の中で、新たな発見や理解の深化を見だし、改めて仮説や場合によっては課題を設定し、情報の収集、整理・分析を行っていくというスパイラル型の学習の姿を想定している。したがって、「探究する活動」とは、生徒が探究しながら調査を通して収集した知識や情報をまとめ、それを図表化するなどして資料を作成することと、それに基づいて自らの解釈も加えて発表し意見交換をしたり、論述したりする言語活動、さらに学習成果を地域に還元するなど社会参画を目指すことを視野に入れた一連の主体的な学習活動を指している。この主体的な学習活動は、授業の中で終結するものではなく、授業後の日常生活においても持続的に行われることが望まれ、この活動を通して生徒の市民性を育てることが求められる。また、ここでいう「地理的技能」とは、調査対象地域の地形図の読図や地図の作製、収集した資料を生かした主題図や表、グラフの作成などを想定している。

なお、生活圏において実際に地域調査を行う対象地域は、調査の内容や方法によっては、例えば学校周辺の狭い地域を設定したり、諸課題によっては一部生活圏を越えた幅広い地域を設定したりするなど、弾力的に考えることが大切である。また、直接的に調査できる地域の規模ならでの調査方法は、野外での観察や調査であるが、学校の状況や調査内容の設定によっては、図書館やインターネットなどを通しての情報収集を行う文献調査を中心とするなどの柔軟な活動も想定される。さらに、学校所在地を中心とした地域の調査については、中学校社会科地理的分野でも大項目「(2) 日本のおんなんな地域」の「エ 身近な地域の調査」として取り扱っている。したがって、中学校での学習内容との関連を図りながら高等学校では生活圏に留意するとともに、地図を活用した多面的・多角的な調査ができるよう、工夫して取り扱う必要がある。

次に、この中項目における学習指導の展開例を示す。これらは、あくまでも例示であり、各学校において、例示と異なる課題事例や取り上げ方で指導を行うことができるのは、当然である。

学習指導の展開例〈「中心商店街の衰退」を扱った地域調査の事例〉

- 1 課題の設定      これまでの地理Aの学習内容と、小・中学校社会科の「地域調査」の経験を踏まえて調査する課題を決めさせる。その際、調査してみたい課題について班別に話し合わせたりするなどの工夫も考えられる。また、なぜその課題を選択するのかという調査の趣旨を明確にさせることも大切である。ここで

は、“なぜ、最寄りの商店街は衰退したのだろうか。どうすれば中心商店街が活性化するのでろう”という課題を生徒が設定したこととする。

## 2 課題の探究

①事前調査 この課題に関連して、生徒自身もっている資料や、図書室やインターネットから入手した資料などから情報収集を行わせる。

②整理・分析Ⅰ (仮説の設定) 収集した情報を整理・分析させ、そこから課題意識に基づいた仮説を立てさせる。例えば、最寄りの商店街の人通りが閑散としている一方で、郊外型の大規模店舗は集客数を伸ばしているという事実があれば、そこから、自家用車の使用に際して利便性の高い郊外型の大型商業施設の商圈に、旧来の中心商店街の商圈が一部取り込まれ、衰退しているのではないかと、そうであれば、中心商店街もモータリゼーションへの対応を図れば、活性化するのではないかなどの仮説が生まれてくる。立てられた仮説をよく検討・整理させた上で、これを検証するための調査項目や調査対象、調査方法などを吟味させ、班別に取材先を割り振り、現地調査の計画を立てさせる。その際、今後の現地調査が、小・中学校社会科での地域調査学習をより深めるようなスパイラル型の探究学習となるように配慮する。例えば、地域調査学習の経験を振り返らせ、現地調査のシミュレーション活動を行わせることも効果的である。何を調査してくるのか、調査対象をどこにするのか、調査に当たり何を留意するのかなどを出し合わせる。

③現地調査 実際の現地調査に当たっては、分担して早めに取材を申し込ませる。例えば、中心商店街での取材を担当する班には、商店街役員に再生への取組を聞かせたり、個々の商店主や利用客に聞き取りを行わせたりする。

④整理・分析Ⅱ (仮説の検証) 現地調査の取材内容をまとめさせる。その際、得た情報や資料を地図化させたり、それを基にして図表を作成させたりする。それと同時に資料の収集や聞き取りから分かったことを整理させ、仮説の妥当性を検証させつつ、不十分な点については情報の再収集と整理・分析を追加して行わせる。新たな発見や理解の深化によって、仮説の修正や新たな課題設定を行うことも考えられる。

## 3 発表

担当ごとに、調査内容を発表させ、さらに調査結果を受けて、中心商店街を活性化させるための方策を全体で討論させ、提言としてまとめさせる。また、授業とは別に機会をとらえて、調査過程の説明や課題と解決に向けた提言をする機会を設ける。例えば、取材先に謝辞とともに報告させるのはもちろんのこと、文化祭での発表や、学校ホームページへの公開、地域への提言なども考えられる。

## 第6節 地理B

### 2 内容とその取扱い

#### (1) 様々な地図と地理的技能

地球儀や様々な地図の活用及び地域調査などの活動を通して、地図の有用性に気付かせるとともに、地理的技能を身に付けさせる。

##### (内容の取扱い)

地球儀や地図の活用、観察や調査、統計、画像、文献などの地理情報の収集、選択、処理、諸資料の地理情報化や地図化などの作業的、体験的な学習を取り入れるとともに、各項目を関連付けて地理的技能が身に付くよう工夫すること。

この大項目は、「ア 地理情報と地図」、「イ 地図の活用と地域調査」の中項目から構成した。これらの内容で構成したのは、身の回りに地理情報が数多くあり、それら地理情報が地図として表現されることで社会生活の中で役立ってきたことに気付かせながら地図に関する技能を習得させることが地理学習の導入として効果的であること、地域調査は習得した地図に関する様々な技能を活用する場面が多いことによる。

「地球儀や地図の活用、観察や調査、統計、画像、文献などの地理情報の収集、選択、処理、諸資料の地理情報化や地図化など」（内容の取扱い）とは、この大項目で取り組む学習活動を例示したものであるとともに、それら学習活動を通して身に付けさせる地理的技能の主な内容を示したものである。授業に際しては「作業的、体験的な学習」を適宜取り入れることが望まれる。例えば、地球儀を実際に手にしながらの学習、地域の景観を観察したり調べたりする学習、地図帳に掲載されている世界の国々に関する統計資料を加工し統計地図を作成する学習、新聞に掲載されている国別の記事を集計し図表に表現する学習などを取り入れることが考えられる。

#### ア 地理情報と地図

地球儀の活用、様々な時代や種類の世界地図の読図、地理情報の地図化などの活動を通して、各時代の人々の世界観をとらえさせるとともに、地図の有用性に気付かせ、現代世界の地理的事象をとらえる地理的技能を身に付けさせる。

##### (内容の取扱い)

アについては、地理的認識を深める上で地図を活用することが大切であることを理解させるとともに、地図に関する基礎的・基本的な知識や技能を習得することができるよう工夫すること。

「地理情報の地図化」とは、各国の人口数や国内総生産額といった現代世界に関する統計を国別の人口密度や国民一人当たりの国内総生産額といった地理情報に加工させ、分布図や階級区分図などの主題図に表現させることを示しており、読図ではなく主題図としての地図の作成を主としている。ここでは、目的に応じて基になる図として適切な地図を選択させ、統計を加工・分析し適切な表現方法を考えさせるといった作業的で主体的な学習を取り入れることが大切であり、統計の加工・分析や地図作成ではGISの活用も考えられる。



## イ 地図の活用と地域調査

直接的に調査できる地域を地図を活用して多面的・多角的に調査し、生活圏の地域的特色をとらえる地理的技能を身に付けさせる。

(内容の取扱い)

イについては、生徒の特性や学校所在地の事情等を考慮し、地域調査を実施し、その方法が身に付くよう工夫すること。

「地図を活用して」とは、「直接的に調査できる地域」を調べるに当たって効果的な縮尺の大きな地図を活用すること意味しており、具体的に「地図」とは、国土地理院発行の地形図、都市計画図、住宅など個別の建物が描かれている地図などを主に想定している。また「活用」とは、それら縮尺の大きな地図に関する技能を意味しており、例えば、調査の目的や方法に適した地図を選択したり入手すること、地図を基に地域調査の目的や方法を考えること、地図を使って地域を歩き調査すること、調べたことや見いだしたことを地図に記録すること、分布図や土地利用図を作成すること、過去と現在の地形図とを比較すること、入手したり作成したりした地図を加工したり分析したりして考察すること、地域調査の結果を主題図にまとめるなど地図を使って表現し伝えること、などを想定している。なお、ここでは、国土地理院から提供されている数値地図や、インターネットでみられる大縮尺の地図や画像から情報を入手したり、それら情報を加工して調査結果を表現したりするなどのGISの活用が考えられる。

「多面的・多角的に調査し」とは、地域における特徴的な事象やその動きに注目して調査したり、地域の多様な事象を項目ごとに調査したりすることを意味している。具体的には、「直接的に調査できる地域」であることから景観に注目して調査したり、項目ごとに情報を直接観察したり聞き取ったりする調査などが想定される。また、その際には、生徒自らが地理的事象を見だし、事象間の関連の発見過程を体験し、地図を活用して地理的に調べることの興味深さを実感できるように取り扱うことが大切である。したがって、上記の「地図を活用して」において例示した学習活動を行わせることや、景観のスケッチや写真撮影をさせたりすること、聞き取り調査やアンケート調査を実施させることなど、この規模ならでの調査方法を主体的に体験できるような工夫が望まれる。

## (2) 現代世界の系統地理的考察

世界の自然環境、資源、産業、人口、都市・村落、生活文化、民族・宗教に関する諸事象の空間的な規則性、傾向性やそれらの要因などを系統地理的に考察させるとともに、現代世界の諸課題について地球的視野から理解させる。

### (内容の取扱い)

内容の(2)については、分析、考察の過程を重視し、現代世界を系統地理的にとらえる視点や考察方法が身に付くよう工夫すること。

この大項目は「ア 自然環境」、「イ 資源、産業」、「ウ 人口、都市・村落」、「エ 生活文化、民族・宗教」の四つの中項目から構成されている。これらの内容で構成したのは、①系統地理的に考察する大項目であることから、自然地理学、人文地理学の領域やそれらの領域における成果を考慮する必要があること、②そうした成果を基に、現代世界の諸地域の多様性をとらえる上に必要な基礎的・基本的な知識や概念を体系的に習得できること、③高校生が関心をもったり、諸資料を収集、選択、処理したりして系統地理的に考察することのできる学習内容が用意できることなどの点を勘案したからである。

「空間的な規則性、傾向性やその要因などを系統地理的に考察させる」のうち、「空間的な規則性、傾向性やその要因など」とは、現代世界の諸事象を系統地理的に考察する際の視点を例示したものである。また、「系統地理的に考察させる」とは、一例を示せば、次のような四つの段階を踏まえて、考察させることと考えることができる。

まず第一に、取り上げる事象を決める段階である。アからエの中項目に関する事象には様々なものが考えられ、また教材化することが可能である。取り上げる事象を決めるに当たっては、具体的な事象の分析、考察の過程を通して、現代世界を地理的な観点からとらえるための基礎的・基本的な知識や概念の習得と現代世界に生起している諸課題についての世界的な視野からの理解に加えて、系統地理的に考察する方法を身に付ける学習も重視している点に留意し、適切に選択する必要がある。

第二に、取り上げた事象に関する分布図、地域区分図、類型地域の分布図などを読み取る段階である。読み取りとは、分布図、地域区分図、類型地域の分布図などを基にして、事象や地域の分布に見られる特色や規則性などを見いだすことである。ただし、この段階での読み取りは、例えば工業立地の一般理論のようなものでなく、大陸沿岸部にみられる、低緯度地方に多い、大都市地域にみられる、先進工業地域に多いといったものでよく、事実把握の段階ともいえる。

その際、単に知識を教え込むことになりがちな学習を避けるため、いきなり分布の読み取りに入るのではなく、地理情報や地図の活用に関する技能にかかわる学習の成果を生かして、事象に関する地理情報がどのようにして集められ、分布図などが作られたのかを考えさせ、その精度、意味、利用上の留意点などを考察させたのち、分布を読み取らせるようにすることが大切である。

なお、取り上げた事象によっては分布図等を作成する作業から始めなければならない場合も考えられるが、その場合でも学習した地理的技能を十分に活用することが大切である。

第三に、そうして読み取った分布の特色や規則性などを分析する段階である。分析とは、事象の

分布の要因を探ることを意味している。具体的には、例えば、南北の違いや中心地との距離などに着目して、要因となる他の事象の分布図と対比したり、あるいは他地域との対比からその地域にもみられる同じ事象の分布の説明を試みたりする。また、異なる年次の分布図や地域区分図と対比しながら、現代世界の動向を調べ、その事象の地理的な意味を考えさせる。

第四に、事例として取り上げた工業なら工業という事象の特色が各地域内で他の事象とどのように関連し合って生み出されたのかについて考察する段階である。また、この段階では、事例として取り上げた事象を中心に据えて、他の複数の地域と比較するかたちで、その事象の地域性を検討する。なお、それぞれの地域性を多面的・多角的に考察し、地域の特色を総合的に明らかにすることは、大項目(3)の地誌的考察の学習で取り上げることになるので、ここではそこまで深入りする必要はない。

#### **ア 自然環境**

**世界の地形、気候、植生などに関する諸事象を取り上げ、それらの分布や人間生活とのかかわりなどについて考察させるとともに、現代世界の環境問題を大観させる。**

「分布や人間生活とのかかわりなど」とは、自然環境に関する広範な事象の中から学習対象として取り上げた具体的な事象について、学習すべき主な事項を例示したものである。例えば、学習対象として地形を取り上げる場合には、主な平野や山脈の分布やその要因を考察させたり、地形と産業とのかかわりや火山・地震災害に対する適切な対応について考察させたりすることを意味している。そうした学習の際、「分析、考察の過程を重視し、現代世界を系統地理的にとらえる視点や考察方法が身に付くよう工夫すること」（内容の取扱い）と示されていることから、ここでは、大項目「(1) 様々な地図と地理的技能」で学習した成果を生かして、実際に簡単な分布図を作成したり、地域区分をしたり、類型地域の分布図を集めたりして、世界の自然環境の分布や人間生活とのかかわりなどを分析し考察するといった学習の構成、展開を工夫して、基礎的・基本的な知識や概念の習得と、系統地理的考察の方法を身に付けることとがバランスよくできるようにする必要がある。

#### **イ 資源、産業**

**世界の資源・エネルギーや農業、工業、流通、消費などに関する諸事象を取り上げ、それらの分布や動向などについて考察させるとともに、現代世界の資源・エネルギー、食料問題を大観させる。**

「分布や動向など」とは、資源、産業に関する広範な事象の中から学習対象として取り上げた具体的な事象について、学習すべき主な事項を例示したものである。例えば、学習対象として工業を取り上げる場合には、世界の主な工業の分布やその要因を考察させたり、工業立地の変化や多国籍企業の展開について考察させたりすることを意味している。そうした学習の際、「分析、考察の過程を重視し、現代世界を系統地理的にとらえる視点や考察方法が身に付くよう工夫すること」（内容の取扱い）と示されていることから、ここでは、大項目「(1) 様々な地図と地理的技能」で学習した成果を生かして、実際に簡単な分布図を作成したり、地域区分をしたり、類型地域の分布図を

集めたりして、世界の資源や産業の分布やその動向などを分析し考察するといった学習の構成、展開を工夫して、系統地理的考察の方法を身に付けることができるようにする必要がある。

#### **ウ 人口，都市・村落**

**世界の人口，都市・村落などに関する諸事象を取り上げ，それらの分布や動向などについて考察させるとともに，現代世界の人口，居住・都市問題を大観させる。**

「分布や動向など」とは、人口，都市・村落に関する広範な事象の中から学習対象として取り上げた具体的な事象について、学習すべき主な事項を例示したものである。例えば、学習対象として人口を取り上げる場合には、世界の人口の分布やその要因を考察させたり、世界各国や地域にみられる人口構成の変化について考察させたりすることを意味している。そうした学習の際、「分析、考察の過程を重視し、現代世界を系統地理的にとらえる視点や考察方法が身に付くよう工夫すること」（内容の取扱い）と示されていることから、ここでは、大項目「(1) 様々な地図と地理的技能」で学習した成果を生かして、実際に簡単な分布図を作成したり、地域区分をしたり、類型地域の分布図を集めたりして、世界の人口，都市・村落の分布や動向などを分析し考察するといった学習の構成、展開を工夫して、系統地理的考察の方法を身に付けることができるようにする必要がある。

#### **エ 生活文化，民族・宗教**

**世界の生活文化，民族・宗教に関する諸事象を取り上げ，それらの分布や民族と国家の関係などについて考察させるとともに，現代世界の民族，領土問題を大観させる。**

「分布や民族と国家の関係など」とは、生活文化，民族・宗教に関する広範な事象の中から学習対象として取り上げた具体的な事象について、学習すべき主な事項を例示したものである。例えば、学習対象として民族・宗教を取り上げる場合には、世界の主な民族・宗教の分布を踏まえてその背景について考察させたり、多くの民族から構成されている国家の政治と宗教との関係について考察させたりすることを意味している。そうした学習の際、「分析、考察の過程を重視し、現代世界を系統地理的にとらえる視点や考察方法が身に付くよう工夫すること」（内容の取扱い）と示されていることから、ここでは、大項目「(1) 様々な地図と地理的技能」で学習した成果を生かして、実際に簡単な分布図を作成したり、地域区分をしたり、類型地域の分布図を集めたりして、世界の生活文化や民族・宗教の分布や民族と国家の関係などを分析し考察するといった学習の構成、展開を工夫して、系統地理的考察の方法を身に付けることができるようにする必要がある。

### (3) 現代世界の地誌的考察

現代世界の諸地域を多面的・多角的に考察し、各地域の多様な特色や課題を理解させるとともに、現代世界を地誌的に考察する方法を身に付けさせる。

この大項目は、現代世界を構成する諸地域の地域性と諸課題を、選択した地域の学習を通して多面的・多角的に考察し、理解させることによって、現代世界の地理的認識を深め、世界の諸地域を地誌的に考察する方法を身に付けさせることを主なねらいとしている。このねらいを達成するため、この大項目は、導入としての「ア 現代世界の地域区分」、中核としての「イ 現代世界の諸地域」、まとめとしての「ウ 現代世界と日本」の三つの中項目から構成されている。すなわち、これら三つの中項目の構成は、まず現代世界を理解するための具体的方法としての地域区分について考察させ、それら区分の在り方を学んだ上で選択した世界の諸地域の特色や諸課題を学び、それらを土台としながら日本の国土の在り方を考察させることによってまとめるという順序になっている。

#### イ 現代世界の諸地域

現代世界の諸地域を取り上げ、歴史的背景を踏まえて多面的・多角的に地域の変容や構造を考察し、それらの地域にみられる地域的特色や地球的課題について理解させるとともに、地誌的に考察する方法を身に付けさせる。

「地誌的に考察する方法を身に付けさせる」とは、この中項目が目指す地理的考察に関するねらいを示したものである。「地誌的に考察する方法」とは、「取り上げた地域の多様な事象を項目ごとに整理して考察」（内容の取扱い）したり、「取り上げた地域の特色ある事象と他の事象を有機的に関連付けて考察」（内容の取扱い）したり、「対照的又は類似的な性格の二つの地域を比較して考察」（内容の取扱い）したりすることを意味している。「取り上げた地域の多様な事象を項目ごとに整理して考察」するとは、地域にみられる様々な事象を項目（例えば、自然環境、資源、産業、人口、都市・村落、生活文化、民族・宗教など）ごとに取り上げ、整理し、それら取り上げられた事象全体を通して地域的特色を見いださせたり、地球的な課題を学習させたりすることである。

「取り上げた地域の特色ある事象と他の事象を有機的に関連付けて考察」するとは、地域にみられる特徴的な事象を取り上げ、その事象に関連する様々な他の事象を関連付け、特徴的な事象のもつ意味を通して地域的特色を見いださせたり、地球的課題を学習させたりすることである。「対照的又は類似的な性格の二つの地域とを比較して考察」するとは、取り上げた地域と対照的又は類似的と思われる他の地域とを比較することによって、それぞれの地域の地域的特色を見いださせたり、地球的課題を学習させたりすることである。これら内容の取扱いに示された地誌的に考察する方法を身に付けさせるよう工夫する必要がある。

なお、地図や各種の統計、年鑑、白書、画像その他の資料から地理的事象を的確に読み取り、地域の変容や構造を考察し、それらの地域にみられる地域的特色や地球的課題について説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論したりするなどの学習活動を充実させる必要がある。